

『張城人物志』書誌雑考

朝倉 治彦

名古屋地方をあつかった近世の人物志には、ここに採用する『張城人物志』と、『張州人物志』とがある。前者は金龍道人の侍者梵韶の編で、後者は、細野要齋編である。

「人物志」を編集した編書には『近世人名録集成』五冊（昭和五十一年―五十二年刊、中島理寿編、最終巻索引）があつて、ほぼ集められてはいるが、凡例にことわつてある如く、写本は収められてない。また詩歌集巻末の作者一覧は不完全であり、芸能関係などのは、収録から外されている。

人名録類は、地域別と分野別とに、大凡分けられる。前者は江戸、京、大坂、東海道などで、前記二書は、これに入る。しかし、『張城人物志』は、この集成に収載されているが、後者はない。

『近世人名録集成』第五巻巻末に「収載書解題」が付されているので、それを、ここに、やや長いが引用する。

体裁 半紙判半載本（小本） 一冊

刊年 安永七（二七七八）年十一月自跋刊 版元 桂錫亭（未詳）

編者 僧梵韶（金龍道人、釈敬雄の侍者。金龍道人の命により編纂した。金龍道人敬雄は、武蔵国の人で天台の僧、日本各地を歴訪し、江戸の浅草寺に寓して金龍道人と呼ばれ、晩年は美濃安八に住し、天明二年七十で没した）。

構成 序（釈敬雄）、題言（馬文翼）、本文・拾遺・自跋・跋（下郷寛）

分類 分野別（儒林・文苑等十分野）

内容 尾張および、その周辺の当時現存の諸家を収めている。

収録人数 一六七名（内、再出者十一名、三出者一名。実際は一五五名）

底本は、跋文、広告の一張を欠いていることが、右に掲げた複製書によつて確かめられる。

本書には、奥付等の刊記が無いので刊行年月は詳かでないが、複製書の広告（『張城栄華』）に己亥正月の年記があることから、安永八年に入ってからの上梓と考えられる。

『平安人物志』（明和五年版、安永四年版）、『浪華郷友録』（安永四年版）に次ぐ初期の地域人名録で、上記の三書が京都で出版されているので、京都以外の土地での最初の地域人名録と言える。

複製書 張城人物志 石田元季編、刊 昭和十五年八月（私家版）

なを、集成第二巻収録『張城人物志』の前に、簡単な書誌が掲げられているので、それも、ここに引用して、査の資として置く。

底本 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（加一九四九）

体裁 半紙判半犀截 一冊

原表紙 原題答

本文乱張あり

跋文一張落張

書名 題簽・見返し 「張城人物志」

版心 「人物志」

編者 梵韶

刊行 安永七年（戊戌、一七七八）自跋 桂錫亭

右の書誌と、前に引用した解題とを合わせると、ほぼ本自体については、或程度知ることができるが、書誌・解題としては不完全で、表紙の色、丁数などについては、極めて不親切のそしりをまぬがれまい。

次に、欠丁を補って、完本にすることを逃がれている。第一巻巻頭の凡例中には

加賀文庫本が不全本の場合も、上記所蔵本に據ったとの条項があるにも拘わらずである（上記所蔵本とは、国会図書館、無窮会、編者をさす）。

『張城人物志』の所蔵機関を、『国書総目録』に検すると

⑤ 国会、岩瀬、鶴舞

⑥ 大阪市大森文庫、名大、日比谷加賀、刈谷、鶴舞、大東急

写・刊ともに、記録されている。たしかに国会図書館には、刊本は所蔵されていないが、活字でも利用者のために、補うべきではあるまいか。複製本の入手は、現在困難なのであるから。

私も原本を見てないのであるが、丁数を数えたと、次のように試算できる。

金龍翁釈敬雄の序文（安永七年秋八月） 六丁（柱刻「一」至「六」）

題言 一丁（「初」）

本文 十三丁（「一」至「十三」）

拾遺 二丁（「十四」と丁付ナシ）

梵韶の跋之 一丁（「十三」）

〈追加〉 一丁（「十四」）

跋 二丁（丁付ナシ）

問題があると注目されるのは、本文・拾遺・跋・追加の丁付であること、一見明瞭である。編者のいう乱丁は、これを指すのであろう。本文は、十三丁裏までであり、尾題

張城人物誌

がある。従って、拾遺一丁半は、第二板の際の附加であらう。十五丁目は、板下が同一でないように思われる。

次の自跋文（安永七年冬至）は、最初からか、後か、判断に困難である。さらに、次の一丁が、再び追加である。初板と加丁本との存在は想像できるが、明確なる判断は、なを考察が必要であらう。

なを、書誌に、次の如く加えて置きたい。

柱題 ○人物志

柱刻 柱題の下に丁付、その下に「新好亭」とある。新好亭は金龍道人の亭名である。

罫線あり

敬雄の序文は 写刻、一面六行

題言 六行

本文 六行

分類

儒林 一丁（「一」） 九人

文苑 五丁と一行（「二」至「六」） 五二人

但し、三丁目表四行目が空行、以下のとは違いがあるとの意か、誤刻を削ったのであろうか。

釈門

六丁裏二行目から七丁裏五行目まで 十五人

刀圭家

七丁裏終行から九丁表四行目まで 十六人

天文曆数

九丁表五行目から裏五行目まで 六人

書家

九丁裏終行から十一丁裏一行目まで 十三人

画家

十一丁表二行目から十二丁表三行目まで 十三人

篆刻

十二丁表四行目から裏四行目まで 六人

聞人

十二丁裏五行目から十三丁表四行目まで 五人

名媛

十三丁表五行目から裏四行目まで 五人

拾遺は

文苑(十四丁表) 三人

儒林(十四丁表裏) 八人

書家(十五丁表) 三人

儒林(〃) 二人

〈追加〉は(丁付「十四」の表裏)分類が記されてなく、十一人中、末二人は画人の註がある。

右の分類を、地域別の人物志などとの比較のため、『平安人物志』明和五年板に見ると、次の如くである。

学者

書家

画家

篆刻者

ト筮者

相者

次の安永四年板では

学者

書家

画家

篆刻者

ト筮者

相者

『浪華郷友録』安永四年板に見ると

儒家

医家

緇流

聞人

書家

画家

作印家

附録

である。右の比較に限っては、『浪華郷友録』を多少参照しているように思われる。
さらに若干を、つけ加える。

外題簽は、長く、太い単郭に、行書で

張城人物志

と、おさめてある。見返しは、三つに分けて、中央に

張城人物志

と書名を、大きく書いてある。先に記した尾題の「張城人物誌」とは異なっている。これは序題の「張城人物誌序」と相応じている。

見返しの書名の左には

桂錫亭 発兌

と、出版元を入れてあるが、この体裁は『平安人物志』明和四年板などに據っているであろう。しかし、本書の場合、見返しの右の空間の文章は、内容を説明せず、名古屋の繁栄盛名について記している。即ち

張城壯麗庄三都 金鷄層樓入画図

地接蓬萊山島近 仙郎濟々五雲衢

この七言絶句は、敬雄の漢文字をつづめたものと推定される。

その序の後半に、次の如き箇所がある。

今茲戊戌夏歸三省鄉里、欲觀光於此都、乃喬居本街、日交都下諸君暨方外士、及所預欽聞人物之多不可諳記也、乃命侍者梵韶使記其姓名称呼字号及宅之所、在、以備遺志焉

右の一節によって、本書成立の状を十分に知ることができる。また、安永七年夏、郷里に帰り、名古屋本町に一時住居して、城下に広く交遊していたことが知られる。しかし、この安永七年夏とあるは、名古屋に出た年である

う。既に前年、郷里安八郡神戸にいたことが知られるからである。詳しく言えば、神戸の善学院境内に迎えられたのである。時に六十六才であった。

金龍道人敬雄については、中野三敏氏に伝があるので、参照願うこととして、名古屋における彼の動静調査を、さらに進める必要があるかと思われる。また『張城人物志』についても、なを考究すべき点多々残っており、続稿の期を得たい。